3-A
刹那
3-A
えうぁ
陵辱学園
ネコ!
Mikenekodouhonten
っぽいもの

三毛猫堂本店ぷれぜんつ

陵辱学園
ネギま！っぽいもの

「裏」麻帆良学園史
刹那の場合 その2　遊壊蔵 … P05

茶々丸の場合　水陸両用 … P15

エヴァま！　さとな たづさ … P27

ぷよぷよ
フィーバー2　西 北々 … P31

ふじっ子アワー
原作だと速度は91キロなのよね。　送り狼 … P41

触手って色々できて素敵だよね。～其の弐～　三毛猫 … P54

表紙・裏表紙
遊壊蔵

挿絵イラスト
西 北々
ナマちう
りっど

よし時間通りに来たな
それじゃあ、さっそく
これに着替えろ！
別に着たくないなら
それでもいいぜ
そうなったら、この前の
写真ばら撒くだけだしな
そうそう、カメラもあることだし
ストリップショーでしょやっぱ
まぁ、逆らってもいいけどね？
「裏」麻帆良学園史
刹那
の場合その２

くっ！

馬鹿、この位が
丁度いいんだよ

お、
乳首たってきたぞ

相変わらず
小振りな胸だなぁ

そ、それは
お前らが無理やりっ！

なんだかんだ言って
感じてるじゃねーかよて

ほらほら、こっちも
こんなにビチョビチョだぜっ、
もうそろそろいいかな

くっ、やめっ・・・

さて、それじゃイクぜっ

んー、キツくて狭くていいねぇ

くっ、あああっ！

やっ、やめっ…んうっ、ああああっ…

おっと、忘れるところだった。折角あるんだから使わないとなっ

これ結構大きいから力抜かないと痛いぜ

なっ、なにを…うっうあああああっ

やっ、やめっ、ぬっ、抜いてっ…んはっ、ああああっ！

一発目イクぜっ
んっ？
んあああっ！
お前はえーよ
そんなこと言っても
こいつの中マジいいって
もっ、やっ、
やめっ・・・
うるせーな、
つべこべ言わずに
しっかり咥えてろよ
んぐっ ちゅっ んんっ

うおっ、、
すげー吸い付き

んんっ・・・

おい、早く終わらせて
代わってくれよ

んはっ、あぁぁ・・・

うるせーな
わかってるよ

こっちもイクぜっ

んぷっ、うぇぇぇ

んだよ、吐き
出さないで飲めよ

へっ、お前のが
不味いんだろ
次は俺の番だ

そろそろイクぜ
膣内でしっかりと
受け止めてくれよな

んっ、やっ、やぁっ・・・
はっ、はぁぁぁっ！

んはっ、もっ・・・・
くるしっ・・・・
はぁ・・はああ

も、もうこれで・・・・
充分だろ・・・・

すげー量だなぁ

これだともう妊娠してるかもな

くそっ…貴様たち覚えてろよっ・・・

おー入った
入ったっ！

や、やだっ…
くるしっ…抜いて…
うあああっ！

あっ、ぐっ……
はっぐっ……
やっ、やめっ…

俺もっ！

で、出るっ！

やぁっ、なかっ…
またっ、いやっ、やぁっ！

ハハハ、ほほほ
ハハハハハハハハ、ハハ
ハ、ハハ！

ふぅ、満足満足

なんだかんだ言って
刹那も何度もイッてたなぁ

まぁ、この調子で
今後とも頼むわっ！
って聞いてねーな

茶々丸の場合

水陸両用

だからあとは

炎王龍の角が・・・

おーいエヴァ

お～い（汗

仕方ない
行ってやるか・・・

む、無視するなよエヴァ
機嫌悪いのか？

ちっ

私は忙しいんだ
キサマなんぞに用は無いから
どっか行けっ

ぺこっ

しっし。

いや・・・
そりゃ用があるのは
こちだからな・・・

それに、オレじゃなく
学園長がお呼びなんだよ

むぅ

茶々丸は先に帰ってろ

はい
マスターお気をつけて

ガチャ

じじい、入るぞ

ん…？

おぅおぅ
わざわざすまんな

ピク

これは…
結界か…？

もぞ…

いや…
この感じ…

もっと別の…

クソじじいめ…
何を企んでやがる…

で？
放送も使わないで
使いを出してまで何の用だ？

ふむ…
学園内では
ちと相応しくない事なんでな
わざわざ使いを頼んだんじゃが――

ちょっとした調査だよ

！

魔法学校のほうから
この二人が派遣されてきてね

キミが学園にとって本当にキケンじゃないかを
念入りに調べるよう言われてるらしいよ

ふんっ・・・

桜通りで一般生徒に手を出したのが
今ごろあちらに漏れたか・・・

なんにせよこの私が
言う事を素直に聞くと思うか？

ムリするなってエヴァ

ゾクッ

もう立ってるのがやっとなんだろ？（笑

なっ！
そんなことっ・・・！

するっ

じわ…

ひあっ
ちゅくっ
ビクっ

きっ…キサマっ！ドコ触って…
くちゅ
んくっ
ガクガク
っ…やっ ヤメ…
それ以上したらっ…

あっ…！
ビクっ
ビクっ
や、イクっ…
ふぁっ、あっ…あっ、ぁぁ…
ガクガク
ぬめぬっ ぬぬっ
ガクガク

……
にちゃ…
はぁ

うん
まぁいいじゃん
効き過ぎてません？

はぁ はぁ
?
まぁいいですけど とりあえず二人に 存分に調査してもらいましょう 全て二人の評価次第ですし
わっ どさっ
こ、コラっ
キュッ
はなせ！
ぷくっ
お？いっちょまえに チクビたたせちゃって カワイー♪
くっ… 変なとこさわるな！
むに むに
おや～？ どんどん新しい お汁が溢れてきてるぞ？
ひょっとして 犯されるの期待してるのか？
ビクッ
!!
すっげー これが0歳の オマンコ…
なっ…
すりっ
ぴ
むず
にゅ
もぞもぞ
かーっ

こりゃぁキツくて入らないかもなぁ
もう一回ぐらいイかせるか

ちゅぷ

ふぁ

ふっ…

はぁ

くうっ

ガク ガク

…いっ！

はぁっ

ぐちゅ
ぐちゅ
ぐちゅ
ぐちゅ

くっ
あっ
あっ

ぷつ

ぬる。

はっ…

ピク。

え…？

はっ…

ピク。

あー…
二人には言ってなかったっけ

ぐいっ

見ての通り
彼女は処女なんだよ

はぁ
はぁ

あ……

ぐぐっ!!
ぷっ
ビクッ

治癒能力が高すぎてね

ぐちゃ
ぐちゃ
ぐちゃっ
ガクガク
ガクガク

ぐっ…、あ…

はっ
はっ
かはっ

すぐに処女膜が再生しちゃうんだよ

いっ…!

だから…

何をしても何をされても

ぬるぅ〜

ひうっ

んっ

ぺちゃ ぺちゃ

あ…

はあ
はあ

この0歳の身体のまま

くぱぁ

彼女は永遠に処女なんだよ

まぁそのうち破瓜の痛みすら快感に変わるだろうけど

ゴクッ

くちから

ぐうっ

がっ…

かはっ

く、きっつ…

ぐぐぐぐっ

い…たっ！

ぷっ

ぷちゅっ

ずぷっ

あぁ〜ぁぁ

は、入った！

あ…がっ！

はっ

はっ

ほら
こっちも咥えて

いっ！

ぶちゅっ

ぶぷっ

ずぷっ

う、く…
動かっ…

ぐりっ

ふぐぅっ！

んんっ

くおぉぉ
腰止まらねぇっ

ばちゅっ

ばちゅんっ

んぐっ…

ぐぷっ

んぐぅ

んんっ

うおっ ダメだ、出るっ！
ぐ、うおおおっ
！
くうっ 犬歯が鈴口に・・・っ
んんっ！
びくっ
びくっ
びくっ
びくっ
ビクッ ビクッ
ちゅぽっ
いーのかよ 中に出しちまって
あ・・・う・・・
はっ はっ
うくっ・・・
ぷぁっ
ぬぷっ
くぅっ・・・ 抜く時がまたっ
いーっていーって どうせ初潮くる前に そっちの成長も止まってるだろ
くちっ
ドロっ♥
あっ
うわっ 大量に出たな・・・
すげーっ 処女膜が締まって 射精してるみたいだ（笑
あっ・・・
くちゅう
あっめっ
ぴゅ
キュッ
もしかして オレの精液射精しながら またイってるのか・・・？
お、オレも我慢できねぇ
あ・・・
はっ
はっ
はっ

やべぇよコイツん中さっきからイキっぱなしだぜ

ふぐっ

ぴくっ

ふぅっ

ぷふぅ

ゴリュっ

ぼちゃっぷっ

ほらっもっと奥まで入るだろっ

がちゃっがちゃがぼっ

んぉっ

ぴくっ

ぼちゃんっぼちゃんっ

ぐぐぐ…

おごおっ

わしゃもっとこうたゆんたゆんがいいのぉ

うん、どーやら好印象のようですね

……

ぼちゃ

ずちゃっ

んごっ

びくっぷっ

ぷっ

くぅっ！またっ…

はっぷっ

ぐぐぐっ

びくっ

めっ

びくっ

ぬちゃ

すりすり

はぁ

くぅ～♥

あ……

はぁ はぁ

ぬぷ

はぁ

ずぷっ

んっ

をぁっ！お掃除フェラしてくれるのかっ

ビクっ

ふうっ

ぬぷ

ビクっ

んっ

んうっ

ぐにぃ

ぷぴぴ

ぴゅっ

ふぁっ

ちんぽが欲しくて欲しくてしょうがないんだろ

だったらこっちにも上げないとなぁ

ふうっ

ぺちゃ

ちゅ

んふぅ

ずぬぬ

あぁぁぁ

ぐっ…こっちも締め付けが尋常じゃないなっ

ぐぷっ

ガクガク

ぱぢゅ

ちゅ

ぱぢゅっ

ぴくっ

ぴくんっ

んっ♥

あはぁっ

イキながら自分でクリ弄ってやがるっ

コリっ

コリっ

はあっ
はあ
はあ
はあ
はあはあはあ
おしりぃ〜♥
ふーふーふーふーふーふー
ん♥っ
ん♥っ
ぱちぱちぱちぱちぱちぱち
ちゅるるる…
ぶぶぶ

それにしても
その媚薬凄いな
あのエヴァをこんなに
するなんてな

や、
やめろ

わざわざ
高いかねだして
買ったかいが
あったな

遠慮なく
入れさせて
もらうぞ

ぐぷっ

あはあああ

ぱとっ

ぱとっ

いやあ

ああっ
あはあああっ

ほらっ
口がおろそかに
なってるぞ

ちゅるっ

ぐぷっ

ぐぷっ

とっ

ぼ!

ぱっ、
ぱあっ
ぱっ
ふっ
ふっ
んふ、
じゅぷ、
じゅぷ、
ハ
ハ
ずっ
ずっ
ずっ
ずっ
ハ
ハ
あふ
あひゃ
ひゃだ
ぱっ
ぱっ
ぱっ

ふぁっ

じゅぽ

ずぷ

ずぷ

ずぷ

ぬちゃ

ずぽっ

ずぽ

ずぽ

ずぽ

で、出る！

ビュルッ

ドクッ

ビクッ

ふぅ良かった良かった

こっちもだ

あぁ流れるのがいいよぉ

ふぃあぁぁはぁぁぁぁぁぁ

ビクッ

ビクッ

ぽっ

ぽっ

ぽっ

そうだな刹那あたりに使ってみるか…

次は誰に使う？この媚薬

ハァ

——おかしい…
妙な気配がしやがる…
ビシッ
なっ!?
ばっ
ばっ
こ…こいつは…っ!?
ぎーり…
ふっふっふ——聞こえる聞こえる…
少女の嘆きと悦楽の吐息が…

だってウサギの耳は長いんだもん☆

えっへん!

待てやコラぁ!!

ぷよぷよ フィーバー2 ドス

↑タイトルです(笑)

PRESENTED BY 西北々

なんかコス替わってるし――!?

なんたよこのビミョーな露出はっっ

魔法の存在知ってるんでしょ？

気にしない気にしない♪

ぬうっ…あのガキに関わったばっかりに

下ちち萌え。

こんな得体の知れねーヤツに純潔を散らされるハメに――

へーきへーき☆

作者の脳内ではクラスの連中ほとんどが処女じゃないから♪

モノローグに割り込むなっっ!!

つーか私もガよっ！

と、ゆーわけで

…っ！

ぷるんっ

むしろ積極的に気持ちよくなっていただきたい☆

痛くないからだいじょぶよー♪

かあっ

…そんな問題じゃねーだろっ…

んぁっ…

ちゅ…

こゅる…っ

ぷっ…っ

ちゅく…

んん…

はあっ…

あんん…

むこぃ…っ

ちゅる

やん…

ひ…っあっ！

くーゅ…っ

はあ…っ
ぴくんっ
ふぁあ…っ！
ちっちゃタンかわいー♡
きゅっっ☆
ど？気持ちいー？
んっ…
聞かない…でよっ
恥かしいってのっ★

ちょっとアイドルモード♪
しすっ
——もういいよ
…それより
このちうが相手
してあげるんだから
ちゃんと
気持ちよく
させてよ…ね♡

ん…っ

ちゅ…

は…っっっ！

ふぁぁ…きついい…っ！

そんなっていっぺんに…っ！

ぴくんっ

げ…っ!?

すみませんちうさん少しガマンしてください

どーん

なんだよそのカオーっ!?

ちうさんの深層意識からご希望の顔を…

望んでねーっっ!!

口調までコネるなーっ！

…でも感度良くなってきましたよちうさん♡

や…っ

ば…ばかぁ…っ！

びくびくっ

せんせぇっ…見ないでぇ…っ

ああっ…やぁ…っ

ぬちゅ…っ

にゅぷっ

は…うう

んぁあ…うぅ♡

おしまい

お嬢萌え。

まいど!西 北々です♪

とりあえずいつものハナし
今回のマンガですが☆

持ちキャラ、というか持ちゲルし
3体目だったり(笑)
うーむ、ヘルマン伯爵のスライム
とガチバトルしやってみるか?

今回のゲルしうさの名前は
「ミッ○ィー」
(あえて伏字、つーか危険なので★)
ちなみにゲルし紳士の名前は
「ゲルハルト=フォン
=プディング18世(爆)」
…まぁ半分はジョークですが(^^;

あとはゲルし猫「ミッケィ」ですな☆
過去作品なので知らない方
ごめんなさい。

最近、とある絵描きさんの影響で
巨乳を描くのが非常に楽しい(笑)

イラストは当社比1.2倍乳の
いいんちょっす☆
今回の北極鍋でもいいんちょ本
描いてるので、チェックしてくださると
シアワセです〜

それでわまた〜♪

〆切当日★　　西 北々

前回に引き続きゲスト依頼ありがとうございます♪
今回はせっちゃ～んこと桜咲刹那でございます
前から描きたいと思ってた烏族とのカラミ描いてみました

あとがき漫画劇場

線引きくらい使え！

という訳で毎度狼です。
今回なんかすごいページ数…
妙にドス黒いページが
かなりの比率になってる訳ですな。
…大丈夫か？（大汗）

触手って色々できて素敵だよね。其の弐

三毛猫

「夕映、夕映〜。どこ行ったの。ねぇ、夕映ってば〜」

薄暗い通路に心細そうな声が響く。だが、その声に返答を返してくれるものはいない。それでも少女は何度も呼びかける。夕映と呼ばれている少女が返事を返してくれるのを期待して。声の主は麻帆良学園の生徒である宮崎のどか。

図書館探検部の一員である彼女は、同じ部活の仲間である綾瀬夕映たちと一緒に図書館島へとやって来てはぐれてしまい、彼女一人だけ迷子になっていた。図書館で迷子になるというのもおかしな話だが、それは一般の図書館の場合だ。

麻帆良学園の敷地内に建つ図書館島と言えば、世界最大規模の図書館であり、地下に向かって増改築を繰り返した図書館の全貌を知る者は誰一人としていない魔境のような場所なのだ。

「夕映、夕映〜」

きっかけは些細なことだった。ふと視線に入った珍しそうな本に気を取られていたそれだけの時間、たったの数分間だったと思う。その間にのどかは仲間に置いていかれてしまったのだ。慌てて後を追おうとして、近道をしようとしたのが間違いだった。角を曲がり間違えたのか、通路自体を間違えたのか、はたまた気がつかない間に階段を下っていたのか。原因は多々あったろうが、のどかが気がついたときには、もうここがどこなのかわからなくなっていた。

瞳に涙をためながら、のどかは自分の携帯電話を見る。アンテナは一本も立っていない。ものの見事に圏外だ。圏外だということは、自分がいまいる場所は携帯の電波も届かない地下深くで、地下深いということは、盗掘者防止のトラップが仕掛けてある危険な場所に他ならない。

「は、早くみんなと落ち合わないと……」

罠に気をつけながら、のどかはゆっくりゆっくりと薄暗い図書館の中を進んでいく。恐る恐る壁に手をかけて歩いていたそのときだった。カタン、と何かの外れる音がする。のどかが手をついていたはずの場所には何もなくなっていた。罠が作動してしまったのだろう。のどかの前にはいつの間にか大きな穴が真っ黒な口を開けて待ちかまえていた。

「えっ、えっ、えええ〜」

まるでスローモーションのようにのどかの身体が横に傾いていく。必死に体勢を立て直そうと手を滅茶苦茶に動かすが、その手は虚しく宙をかくだけだ。

「そっ、そんなぁ〜」

のどかの悲鳴だけをその場に残して、のどかの身体は吸い込まれるかのように穴の中へと落ちていった。

穴の中は滑り台のようになっていた。のどかは暗闇の中を猛スピードで下って行く。おしりが焼けるように熱い。まるでウォータースライダーで直滑降していて出るかのような感覚。しかも視界はゼロなので恐怖はその数倍だ。止めることすら出来ずに、その中をのどかは悲鳴を上げながら落ちていく。スピードもかなり出ているらしく、悲鳴はあっという間に後ろへと流れていった。

滑り落ちてからたった一瞬のことだったのか、それとも数分経った頃なのか、暗闇の先に明かりが見えた。その明かりはどんどん大きさを増していき、ついにのどかをその中に取り込んだ。その刹那、ドスン、という音と共にのどかは地面に投げ出されて小さな声を上げた。穴の終点はここだったらしく、のどかは傷おしりを押さえながら立ちあがる。

「ここは……」

きょときょとと辺りに視線を巡らせる。そこは、図書館探検部ののどかにも見覚えの無い場所であった。個室のような小さな部屋には、薄汚れた紙やゴミなど物が乱雑に散らかっている。

そこにある本棚も、のどかがいつも見慣れている本棚とは違い、廃材のようなボロ木で作られていた。まるで個人の持ち物といった方が良いかも知れない本棚飾りけなどなく、どれもが粗末な作りをしている。それでも耐久性はあるようではあるが、高さは三メートル程だろうか、上の方にもびっしりと本が並んでいるにも関わらず本棚は重量にびくともしていない。

そこに収められている本もまた、どこか異様だった。まずは厚さ。一冊がまるつれで百科事典のような厚さがあるのだ。しかも見たことも無い装丁で背表紙にはこれ、なんなんだろう……」

また見たこともない文字が書かれている。本の色もばらばらで赤だったり黒かったりと、てんで規則性がない。

図書委員としての性とでもいうのだろうか、自分が迷子であるという認識はどこへやら、好奇心の勝ったのどかは恐る恐るではあるがその本の中の一冊へと手を伸ばす。重々しい音を立てて本が抜き出される。手に取る者も久方ぶりなのか、血抜をこいた本が棚にたまった埃を払いのけてそこだけ本棚の地が見えた。その色は、の固まった様な赤黒い色をしていた。

「お、重い……」

手にとって見ると、本はずっしりと重い。両手で本を抱えて、のどかはその本をまじまじと見つめる。かなりの量の本を読んで、その数倍は本を見てきたのどかも、それは初めて見る本だった。もしかしたら目録にも載っていない稀覯本なのかもしれない。

「これ、なんて書いてあるんだろう……？」

本の重さに耐えられずに、その場へと座り込む。膝の上に本を置いて、ざらざらとした表紙に書いてある文字を指でなぞる。その文字もまた、のどかにはわからない文字である。ひっくり返して裏を見る、裏にはなにも書いてない。再び表に向けてみる。

「……」

ページを開いてみようと、のどかは表紙に手をかける。その時だった、本の隙間から光が漏れる。暗闇に目が慣れきっていたのどかは、突然の出来事に驚き本を投げ出そうとする。手を離そうとしたそれよりも早く、本の中から伸びてきた何かがのどかの手首をがっちりと掴んだ。

「きゃあっ」

驚いたのどかが慌てて払おうとするが、それはしっかりとのどかの手首に巻きついて離れない。それどころか本から湧いてきたそれはどんどん巻きつく力を強めていく。

「えっ、なっ、なにっ……」

のどかの身体が小刻みに震える。自分の手に巻きついているもの。それはまるでぬめり気をもった植物の蔓のようなものであった。それが生きているかのように波打っている。どこかで見たことがある。のどかは整理の付かない頭の中で漠然とそう思った。そう、それはまるでゲームなどに出てくる化け物の持つ触手のようであった。それが後から後から本から溢れてくる。

「ひっ、ひぃっ……」

信じられないものを見たのどかの顔が歪む。恐怖で腰が抜けたのか、のどかは逃げ出すことすら出来ない。ただその場で震えているだけだ。そうこうしているうちに本から這い出た触手がのどかの身体に巻きつき拘束していく。

「やっ、やだっ。はっ、離してっ」

そこでやっとのどかは逃げ出そうと抵抗を始める。だが触手の力は強く、それすらままならない。そもそも逃げ出すタイミングが遅すぎた。

本から溢れた触手はやがて部屋全体へと広がり、のどかの退路はもうどこにもない。まるで蜘蛛の糸に引っかかった獲物のようになりながらも、それでものどかは必死に逃げようと暴れる。

これまで以上の光が本から溢れた。呆然とそれを見つめるのどか。光はその光力を増し、空中には文字のようなものが現れた。やがてそれは糸の様に連なって浮かび上がり、魔方陣のようなものを形成していく。のどかはその光景に眼をそらすことが出来ない。光と魔方陣は収束して融合し、さらなる光が本から溢れ出る。大気がびりびりと震える、部屋の温度が冷たくなった気がした。

光が弾けて、のどかの瞳は信じられないものをその視界に捉えた。本がまるで何かの穴のように思えた。なぜなら、その中から見たこともない何かが這い出してきたからだ。

「きゃぁぁぁぁぁぁっ」

大声を上げる。恐怖に身体が硬直する。そこに存在しているというのに、のどかは自分の見たものが到底信じられなかった。本から出てきたのは、触手の持ち主。化け物としか形容できないものだった。

「なっ、なんでっ、なにっ、これっ……」

言葉にならない。逃げ出そうとも逃げられない。恐怖に引きつるのどかの前に、いきなりそれはその姿を現した。スライムのような軟体生物特有の身体。まるでそれはプリンのようだ。しかし、それは確実に生きていた。

身体をふるふると震わせながら、化け物はのどかの側へと寄ってくる。身体の部分である触手を伸ばし、のどかを逃がそうとはしない。残りの触手はのどかの服の隙間から中へと入り込んでいく。ぬるりとした気色の悪い触手の感触にのどかの肌が泡立つ。

「ひっ、やぁぁっ」

のどかの服が邪魔だとでもいうように、触手はのどかの服を器用に剥ぎ取っていく。スカートを脱がし、上着を内側から破っていく。普段は制服の中に隠されているのどかの肌が外気に触れる。それを見て化け物は呻き声のような声を上げた。久しぶりの獲物に出会えて喜んでいるような、そんな鳴き声だった。

「やぁ、やだっ……はっ、はなしてっ、ください……」

化け物は床を滑るように移動して、のどかに抱きつく。化け物のぶよぶよとした表面にのどかの身体が少しだけ埋まる。

化け物に言葉など通じるのかわからない。のどかが力で対抗できない以上は言葉で許しを乞うしか方法はない。許しの言葉を口に出して、のどかは力なく化け物の身体を叩く。だが、のどかの拳は化け物の身体に吸収されるようにめり込むだけだった。逆に化け物は好き勝手に触手を動かしてのどかをさらに拘束していく。その一本一本がまるで生きているかのように動く。

「やっ、はっ、やっ、そこっ……だめっ」

のどかの身体を這い回っていた触手がパンツに手をかける。のどかが押さえるもなく、あっという間にパンツは膝までズリ落とされた。

「やだぁっ」

化け物の前にのどかのピッタリと閉じたアソコがさらされた。まだ毛も生えていないアソコは綺麗なピンク色をしていた。

「やだっ、やめてっ……だれかっ、せんせっ、ネギ先生っ」

必死に助けを求める。一瞬だけ自由になった手でどこかを掴もうとするが、そもすぐに触手によって絡めとられてしまう。それでも暴れるのどかを触手は気もせずにその先を胸にまで伸ばしていく。

のどかのブラジャーを剥ぎ取り、胸を露出させると、触手はのどかの桜色の小な乳首に巻きついていく。巻きついた触手が乳首を器用にキュッと締める。

「ひぅっ……やっ、だめっ、だめぇっ」

のどかの声も虚しく、化け物は今度は舐めるように乳首を触手でこすり始めた。

くすぐったいようなむず痒いような感触にのどかの身体が小さく震える。
「ひっ、やっ、ちっ、乳首っ、だ、だめっ……そんなっ、やぁ……誰にも、さっ、触られてないのに……やっ、だめっ……んはあぁっ……」
執拗な触手の責めに、のどかの身体からは力が抜けていく。もう弱々しく化け物の身体を叩くくらいの抵抗しかしない。化け物に襲われているという悲し過ぎる現実から、のどかの瞳からは涙が溢れて頬を伝う。
「たっ、助けてっ、ネっ、ネギ先生っ……ネギ先生っ」
自分の好きな人の名を呼ぶ。必死になって助けを求めるが、現実は小説のようにはいかない。のどかの叫びにネギはおろか誰も助けには来ない。
そうこうしているうちに、触手がのどかの下半身を這いずり回る。触手はのどかの太ももに絡みつき、上へ上へとやってくる。嫌な予感がのどかの脳裏を駆けた。そして、こういう場合、嫌な予感というのは確実に当たるのだ。
触手によってのどかの両足が左右に開かれた。大股開きにされたのどかの顔が羞恥に歪み声を上げる。触手はのどかのアソコへと伸びてきたのだ。
「いやぁっ、そこっ、だめっ、そこはっ、絶対にだめぇ。あっ、はぁぁぁっ……」
何の予備動作も準備もなく、触手が勢い良くのどかのアソコへと侵入を始めた。無理やりにアソコをこじ開けられた痛みにのどかが叫ぶ。それでも触手は止まることなくのどかの膣内へと進んでいく。痛みで意識が飛びそうになる。涙で視界が歪む。いっそ意識を失ってしまえば楽なのだろうが、それでも痛みのせいなのか、のどかは意識を失うことが出来ない。
「ひっ、ひぐっ、ぐっ、うあっ、いっ、いたっ、やっ、やっ……」
のどかの処女の証である血液が触手を伝ってポタポタと床に赤い染みを作っていく。初めては好きな人とロマンチックに。そんなのどかの夢はこの瞬間にもろくも崩れ去った。
「そんなっ、こんなのっ……うそっ。うそ……うそっ……。誰か……嘘って……ひくっ……ううううっ……うええっ……」
どうしようもない悲しみ、無慈悲に奪われた処女。のどかは全身で抱えきれないほどの絶望を抱え声を上げて泣き出す。それでも化け物には意に介した様子など無い。
触手はのどかの膣内を動き回り、膣壁をこすりさらに奥へと進んでいく。小さな隙間をみつけて、二本目の触手ものどかの膣内へと入り込んでいこうと動く。
「だ、だめっ、もっ、もう入らないのっ……だ、だめっ……だめぇぇぇぇ……はぁぁっっ、やだっ、ま、またっ、はっ、はいってっ、はいってくるぅ……んんっ……ああああっ……やぁぁっ」
ズチュッ、と音を立てて二本目の触手が膣内へと無理やり入り込んでくる。開通したばかりののどかの膣内はきつく、ねじり込むように触手は奥を目指す。破瓜の血が潤滑油の役目を果たし、最初よりはスムーズに奥へと向かう。しかしそれでものどかの痛みは激しく、触手が動く度に声を上げてしまう。
「ひぐっ、ぐっ……うあぁぁっ……ねっ、ネギせんせっ……たっ、たすけてっ……たすけて……くださっ、はぁぁあ……」
狭い膣内で二本の触手が我が物顔で暴れまわる。膣内をいい様にかき回されてみと苦しさで限界なのだろう、のどかの意識はここでようやく途切れ途切れになっていく。だが、化け物は意識を失うことを許しはしなかった。
化け物はのどかを抱え上げると、子供におしっこをさせるような体勢へと変えた。のどかの両足にも触手が絡みつき、足を閉じることは出来ない。必然的に触手が入り込んでいるアソコが丸見えになる。
叫び声を上げるのどかだったが、それは次に息を飲む動作へと変わる。のどかの下、丁度化け物の股間部分に、大きな肉の塊が隆起していたのだ。それは化け物の生殖器であるのだが、もちろんそんなことはのどかにはわからない。だが、それで自分がどうされるであろうことは悲しいほど容易に理解できた。化け物はソレで自分のアソコを貫くつもりなのだ。
それが当たりだとでもいうかのように、先に侵入していた触手が入り口付近まで戻り、のどかのアソコを左右に拡げ、生殖器が入りやすいようにと働く。
「ひっ、いやっ、やぁぁぁぁ」
のどかの顔が、これ以上はないほどの恐怖に歪んだ。泣きながら子供のように首を振っていやいやをするが化け物はゆっくりと、抱えていたのどかの身体を下ろしていく。その下にはビクビクと蠢く生殖器。
のどかはもう恐怖で気が狂ってしまいそうだった。のどかのアソコに化け物の生殖器が当たる。熱を持って蠢く化け物の生殖器にのどかの身体がビクリと反応する。生殖器は、のどかのアソコに入るにはあまりに巨大すぎる。
「やだやだやだやだ、たっ、助けてっ、お願いだからっ。助けて、誰か助けてっ。生映っ、ネギ先生、誰でもいいから、助けてっ」
それは淡い夢だった。化け物は自分の生殖器にのどかのアソコをあてがうと、すのためらいも無しに一気にのどかの身体を貫いていく。
「ひぐっ、ひぁぁっぁぁぁっ」
極太の生殖器をぶち込まれて、のどかが叫ぶ。生殖器は勢いを衰えさせることなくのどかの膣内を奥へ奥へと進んでいく。身体が左右に引き千切られそうな痛みがのどかを襲う。それでも痛みで気絶することは許されない。
「あっ、ああ……はっ、はいっちゃった……お、おく……まで……くっ、くるしっ……くるしいよぉ……ねっ、ネギせんせぇ……」
息も出来ないほどの圧迫感。のどかは陸に打ち上げられた魚のように空気を求めて口をぱくつかせる。頭に空気が充分に回らないのか、どこか言動がおかしい。良化け物が満足げに一声鳴く。それはきっと、のどかの膣内がことのほか気持ちにいからなのだろう。化け物は入れただけでは満足できないとでも言うかのように、のどかの身体を抱え上げ再び生殖器へと一気に下ろす。
「ああああああっ」

再び貫かれるのどか。化け物は、まるで人間でいうところの座位のような動きでのどかを犯していく。違うのは化け物だけあって動きが激しいのと生殖器の大きさくらいだ。小さなのどかのアソコは生殖器によって大きく開かれている。窮屈そうに生殖器が動くたびに膣壁全体がこすれ、のどかに欲しくも無い痛みを伝えていく。周りの触手も活発に動き始め、身体が触手に埋まっていくような錯覚さえ覚える。

乳首に絡みつく触手、クリトリスを締め上げる触手。その度にのどかは甲高い声を上げるが、ついには口の中にまで触手が入り込んでくる。まるで触手に輪姦されているかのような状態だ。

不意に、触手の先から白濁した液体がのどかに向かって飛び散る。

「ふあぁぁっ」

身体全体でのどかは粘ついて生臭い匂いのするそれを受け止める。そしてまた次の触手からも同じように白濁液が飛び散る。あっという間にのどかの身体が白く汚れていく。ついには口の中にまで白濁液を出されてしまう。生臭い匂いに吐き出しそうになるが、すぐに次の触手が口に蓋をしてしまう。窒息しない為には喉に流し込むしかなった。粘ついたそれは到底飲み干せる量ではなく、口の端からだらしなく流れ出てのどかの身体をさらに汚した。

化け物の息が荒くなった。その途端、生殖器が大きく動いた気がした。それは気のせいではなかった。化け物が鳴いて、生殖器をのどかの最奥に無理やり突っ込んだその瞬間、その先から大量の白濁液がのどかの膣内に流し込まれた。

「ひっ、やぁぁぁぁぁぁ。あ、熱い……熱いのが、熱いのが膣内に……」

ゴプリという音を立てて、膣内に入りきらなかった白濁液がのどかの中から流れて出してくる。それはかなりの量であったらしく、なかなか流れ出るのが止まらない。流れ出した白濁液は、のどかの股間はおろか、太ももまでをべったりと汚す。辺りには白濁液から発生した生臭い匂いが漂いはじめる。

「あぁっ……あっ……な、なか……やぁ……あ、あつい……おなか、おなかのなか、あつい……あついよう……」

のどかは化け物の懐でぐったりとしている。化け物はのどかを解放しない。さきほどのどかに欲望を放ったばかりだというのに、化け物の生殖器は衰えることなく相変わらずの硬度を保っている。化け物は再び怒張した生殖器をのどかの膣内へと埋めていく。

「ひやっ、もっ、やぁ……やめて、おねがいだからっ……もっ、だめっ、こっ、壊れちゃう……あっ、やぁぁっ」

白濁液を掻き分けて生殖器がのどかの膣内を進んでいく。隙間からいやらしい音を立てて漏れ出した白濁液が床に飛び散る。その光景は、まるでのどかがお漏らしをしているかのようだ。

最奥まで生殖器が届き、化け物が再び動き始める。のどかの身体が自分の意思とは無関係に揺れる。

「もっ、だめっ、おっ、おねがいっ……もうやっ、やっ……やぁっ……んぐっ、ふうううっ……あっ、ふぁっ、やっ、あああああっ……」

許しを乞うのどかの口内にまたもや触手が侵入する。口内を蹂躙され、のどか助けを呼ぶ声を出すことも許されない。口からはくぐもった声が漏れるだけだ。

んぐっ、んふぅっ……んあっ、あっ、はぁぁっ……」

触手から放出された白濁液が再びのどかの喉を流れていく。苦しそうにそれを飲み込むが半分ほども飲み込むことが出来ずに吐き出してしまう。手に握っていた触手からも白濁液が放たれる。のどかの顔が白濁液と汗と涙でぐちゃぐちゃになる。それでも触手は動きを止めない。穴という穴に触手は入り込もうとし、その中の一本がのどかのアナルにまで入り込む。

そ、そこはっ、ひぐっ、ひあっ、ひぐぅぅぅっ」

入り込んだのは一本だけではなかった。触手は良い穴をみつけたとばかりにアナルに殺到し、すぐに何本もの触手がアナルへと無理やり入っていく。裂けそうなほどの痛みにのどかの顔が歪む。それでも口内に侵入している触手のせいで悲鳴すらあげられない。

ふぐっ……ふぐぅぅぅぅっ……ふっ、ふぁぁっ、ふぁぁっっ……あっ、やぁ……だ、だれ……か……ね、ネギ……ネギせ、せん……せ……はっ、うあっ、っ、はぁぁぁっ……」

アナルにまで大量の白濁液が流し込まれる。腸にまで届きそうなほど大量の白液にのどかの腹部が、まるで妊婦のように膨れた。

身体にも雨のように白濁液が降りかかる。全身を白濁液まみれにされて、それもなお化け物の動きは止まらない。

んはっ、ふぐっ……ひっ、あっ……あぁっ……あああっ……んぐっ……はっ、ぁっ……やぁぁっ……だめっ……」

のどかにはもう何が何だがわからなかった。自分が今どんな状態でどんな酷いことをされているのかさえわからない。意識を失いたいが、身体中の刺激がそれは許してはくれない。化け物がそうしているのか、のどかが意識を失っても、そはほんの一瞬ですぐに覚醒させられてしまう。身体中の力を使い果たし、のどはもう化け物のなすがままになっていた。

んぐっ、んんっ……はっ、やっ……だめっ、そこっ、だめっ……はぁぁっ……んぐっ……んっっ、くちゅっ……あぁ、はぁむっ……はっ、ああああっ……」

暫くすると、のどかと化け物の結合部分からグチュグチュという水音が立ち始る。のどかの顔も、ほのかにピンク色に染まってきてさえいる。信じられないとだが、のどかの身体は化け物の責めに感じ始めているようだ。時折甘い声がじっているのを、のどかは理解しているのだろうか。

はうっ……うあ……あっ、な、なんでっ……そんなっ……うやっ……やぁっ……はぁっ……どっ、どうしてっ……」

痛みから快感へと、のどかは自分の意思とは無関係に化け物によって開発されていく。嫌でも自分ではもうどうしようもなかった。声をあげてしまうのも止められなかった。触手によって身体中の性感帯を同時に責められ、執拗に嬲られては最初から逆らえるわけがなかった。

「あっ、ひんっ、んっ……んちゅっ……はぁっ……はぁっ……あっ、やっ……そんあっ……なんでっ……やっ、きっ……きもちっ……んんっ……はぁっ……」

思わず口をついて出ようとした気持ち良いという言葉を必死に飲み込む。痛みはもうどこかへ吹き飛び、後はもう痺れるような快感だけが残っている。それでものどかはその言葉だけは口に出さない。口に出したら全てが終わってしまう、そんな予感がどこかでしていた。

「ひあああっ」

ビュルルと音を立てて、もう何度目かもわからない白濁液が膣内に流し込まれる。のどかは白濁液の熱さに反射的に声を上げる。すぐにアナルにも同様の感触が伝わる。両方の穴は拡張されすぎてもう閉じることはない。綺麗なピンク色だったのどかのアソコは、短時間で痛々しく赤く腫れ上がっている。両方の穴からとどまる事なく溢れる白濁液は、まるでのどかが流しているかのような光景を作りだす。そしてまた穴という穴に栓をするかのように触手が入り込んでいく。

「もっ、だめっ……こっ、こわれっ……こ、こわれちゃうのおっ。うああっ、あっ……ああああっ……だめっ、もっ……やぁぁっ」

のどかの身体が弓なりに弾ける。化け物はそんなのどかの姿を見て楽しそうに一声鳴く。まるでのどかの痴態を笑っているかのような声だ。化け物の鳴き声を聞きながら、のどかは自分の頭がだんだんと何も考えられないくらいに真っ白になっていくのを感じていた。

そして、化け物が何十度目かの射精をしたその時だった。のどかの中で何かがついに壊れた。化け物が飽きることなく挿入してきたその時だった。

「ああああっ……そこっ……いいっ……いいのっ……アッ、アソコが……アソコがジンジンするのっ……いいっ……いいよっ……気持ちいいっ……すごっ……すごいっ……はぁぁぁんっ」

のどかがついに歓喜の声をあげた。自分から腰を振り、美味しそうに触手に舌を伸ばし始める。それはもう、誰もが知っているのどかの姿ではなかった。

「いいのっ……気持ちいいのっ……もっと、もっと……気持ちよくしてぇっ……」

化け物の執拗な責めによって、のどかはついに壊されてしまった。理性は深い場所へと沈み込み、もう二度と浮上することはないだろう。

「ね、ネギ先生っ……気持ちいいっ……先生のコレっ、きっ、気持ち良いのっ……もっと、もっと……ネギせんせぇ……わたしをっ……きっ、気持ちよくしてっ……はっ、んんっ……」

壊れた精神がそこにいないはずの人物の姿を作り出した。のどかの中では、自分の相手をしているのは化け物ではなく、憧れのネギだ。だから喜んでも良いのだと自分に言い聞かせているのだろう。儚い夢。それでものどかにとってはそれが救いなのかも知れない。最後に幻とはいえ良い夢が見られたのだから……。

図書館島のどこかの部屋。誰も知らないその部屋は、むせかえるような匂いに支配された空間。部屋には動くものの姿が二つ。一つは何本もの触手を持った化け物としか形容できないもの。

そしてもう一つ、化け物に吸収されているかのようにつながれた女性の姿。その女性の名は宮崎のどか。あれからずっと犯され続けて今に至る。

「の、動いてる……おなかの中で、赤ちゃんが動いてる……あはっ……もっ、もう少しで生まれるよっ……ネギせんせぇと、わっ、わたしの子供が……」

何度も膣内に出されて、化け物の子を身ごもってしまったのだろう。のどかの腹は膨れ、胸からは母乳が触手によって搾り出されている。妊娠しているというのに、のどかは今も犯され続けている。

「あはぁっ……だめっ……だめだよせんせぇ……そ、そんな激しくしたらっ……あっ、だめっ……あっ、またっ、イッちゃう。またイッちゃうのっ……あっ、あっ……はぁぁん」

ビクンと身体を震わせて、のどかは絶頂へと登りつめる。

「あぁっ、す、凄いです……すごく、熱い……。ネギせんせぇ……こ、こんなに一杯出して……きっ、気持ちいいですぅ……」

惚けた表情でのどかが身体を預けたのはネギではなく醜い姿の化け物だ。それでも、のどかの濁った瞳に映るのはネギの姿に他ならない。だからまた、のどかは化け物におねだりをする。

「ネ、ネギせんせぇ……もっと、もっとわたしを気持ちよくしてください……もっと、もっと一杯……せんせぇのをください……お、お願いします……」

目の前で揺れる触手を愛しそうに口に含み舌で先をくすぐる。化け物はのどかの望み通りに生殖器をのどかの膣内へと挿入していく。

「あっ、はっ、入ってくる。せんせぇの……ネギせんせぇのが……はっ、入ってる……いいのっ、もっと、もっと……せんせぇので……わたしっ、わたしのアソコをっ……か、かき回して欲しいのぉ」

すっかりと壊れてしまったのどかを犯しながら、化け物は満足そうに身体を震わせて大きく鳴いた。

その後、宮崎のどかがどうなったのかは、誰も知らない……。

これを描いたM属性の人： ナマちう

ゲスト様＆メンバーのホームページ♪

三毛猫、遊壊蔵、闇貫き

「Angel's Messenger」　http://home.att.ne.jp/apple/mikeneko/

水陸両用

「初霜の月」　http://www.axs-smf.net/kanna/

西 北々さん

「北極鍋」　http://arc-pan.hp.infoseek.co.jp/

送り狼さん

「必殺！」　http://www.hissatsu-style.com/

りっどさん

「Free Style」　http://haruka.saiin.net/~freestyle/

ナマちうさん

「Apa-Revo」　http://www114.sakura.ne.jp/~apa-revo/

さとな たづささん

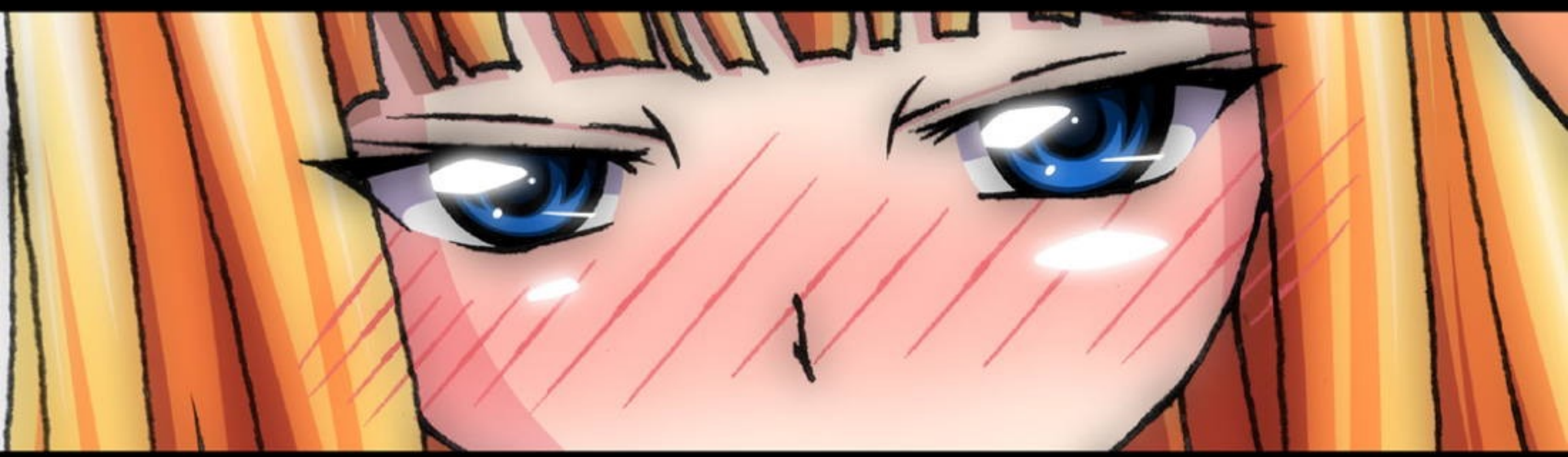
「アトリエETS」　http://www5d.biglobe.ne.jp/~ateliere/

奥付

発行　三毛猫堂本店
発行日 2006 年 8 月 13 日
印刷所 ポプルス様

御意見御感想はこちら
mikeneko@filith.sakura.ne.jp
http://home.att.ne.jp/apple/mikeneko/

無断転写厳禁

ADULT ONLY

三毛猫堂本店